

listening

コミュニケーション能力の基本は「聞く力」
新タイプ入試で注目される

「リスニング力」

2020(令和2)年から、小学校、中学校、高等学校と改訂されてきた
新学習指導要領においては、「主体的な学び」・「対話的な学び」・「深い学び」を軸として、

四つの能力「読む」「聞く」「書く」「話す」

という資質や能力を向上させることを重視しています。

昨今、“コミュニケーション能力”を向上させることの重要性が
話題にのぼる機会が多くなっています。

そこで、今回は「コミュニケーション能力」の一つである「聞く」ということをテーマに、
受験生の「聞く」能力を重視した中学入試を実施されている2校を訪問し、お話を伺いました。

取材・文：石田教育情報研究所 石田温則

取材：首都圏模試センター 教材企画ディレクター 野尻幸義



「リスニング入試」に込められたメッセージ

多摩大学附属聖ヶ丘中学校 入試広報部部長 吉岡和真 先生

すべての学びの基本は 「聞く力」

Q

「リスニング入試」を実施された
経緯はどのようなことだったの
でしょうか？

まずお伝えしたいことは、本校の「リスニング入試」は、入試の多様化の中での単なる話題性を追求した結果の入試ではない、ということです。そして、中学入試における“新タイプ入試”と呼ばれる入試も、単なる生徒募集のために実施されているものではない、ということです。本来入試は、学校として「入学して欲しい生徒像」を伝える重要なメッセージです。そこでまず、本校ではどんな生徒を求めるのかを教師間で考え話し合い、入試で見たい“本校入学後に学ぶために必要な力”とは何かをつきつめていった時に、「小学校6年生として当たり前前に持っているはずの学ぶ力」と、「学ぼうとする主体的な意欲」があれば良い、との結論になりました。そして、その視点で受験生の力を測れる入試とは何か、と考えた結果生まれたのが「リスニング入試」だったのです。

Q

「リスニング入試」ではどのような生徒を求められているのですか？



※メタ認知

「知る（見る・聞く・感じる・話す等）・覚える・考える・判断する・まとめる等」を実践している自分を、（上位から）客観的に認知する能力のこと。

Q

中学受験とやりたいことを続けることの両立は望ましいと思います。入試と自己肯定感ということで考えるならば、これまでの入試において、学ぶということは「この学校に入るためには成績を上げなければならない」という弱点補強中心になりがちで、保護者の眼も同様に受験生の弱点に注がれがちになり、なかなか自己肯定感を高める方向にはつながりません。強みを活かすような学びができれば、自己肯定感が高められ、自ら自分の弱点に気づき、それと向き合い克服しようとする意欲がわいてくるように思います。その意味からも、自分の強みを活かせる入試の存在は、受験生にとって非常に幸せなことではないでしょうか。また、そのことが自分の居場所を持てることにもなると思います。

この「リスニング入試」で受験していただきたい受験生は、実は中学受験の学習塾に通塾していない小学生です。例えば、習い事を一生懸命続けている、何かに夢中になっているなど、多様なエネルギーにあふれた小学生です。ただ残念ながら、習い事を一生懸命している小学生も、6年生になると、習い事と塾での学習が両立できずに、どちらかを我慢しているのが現状だと思います。しかし、中学入試はそれで良いのかと考えました。ですから、本来の小学6年生が自分のやりたいことを一生懸命続けて、それでも頑張れるところが中学校ではないか、やりたいことや習い事を楽しみながら続けることと中学入試は両立できるのだ、ということが最も訴えたいことだったのです。しかし、私立中学校である以上、入学後の学力は必要ですから、それはどのような学力かと考えた時に、小学6年生が学校の授業できちんと学んだ力で良く、加えて入学後に一生懸命に学ぼうとする力だという考えに至りました。そして、その学びの基本は何かと考えた時、それは人の話を聞く力だということが見えてきたのです。人の話を聞くということは授業中だけではなく、日常生活の中で当たり前に行っていますし、人の話をまずきちんと聞いて理解し自分の考えを表現することによって相手とのコミュニケーションが成立する訳ですから、生きていく上で聞く力が絶対に必要な力です。そこから、人の話をきちんと聞こうとする姿勢を持っていさえすれば、本校としては入学後あらゆる面で十分に頑張れるだろうと判断して考え出したのが「リスニング入試」だったのです。一生懸命に人の話を聞いて、それを自分のものにしようとする意欲・心構え・その気持ち、つまり※メタ認知能力が本校に入学しようとする受験生に、我々が最も求めている力です。

確かに、居場所が大切ですね。最近、生徒を見ていると自分に自信を持てていないと感じられることがあります。生徒には、勘違いでも良いのですが、何かしら自分にうぬづけている部分が本来はあるはずで。例えば彼にはスポーツでは勝てないけれどこの部分では勝っているとか、これはだめだが別のところでは勝っているなど感じることもあるはずで。私自身にもそんな思い出があり、友人とお互いの長所を認め合っていました。しかし本校の生徒を見ていると、何に関しても自信を持てていないというか、極端に人前に出ることを嫌がります。授業中に発言することを嫌がりますし、やってみようと思っても挙手する生徒も少ないです。最近、そうしたことを目にする機会が増えてきたように思います。「私はこれができる」とか「私の良いところはここだな」などと、自分自身で認めることによって、自分を表に出せるようになっていくのです。だからこそ、生徒たちにはそうしたエネルギーを持って欲しいなと思っています。何かに夢中になった経験のある生徒は自信を持っていますし、特に運動面で自信を持っている生徒は「これは負けない」という強い気持ちを持っていると思います。そんな生徒を増やしていきたいですね。

Q

小学校では「グループワーク」のような形態の授業等が増えていて、そこでは「協働性」を養うということが主目的になると思いますが、そこでの「協働性」の捉え方が本来求められているものとは異なっているケースが少なくないという話を伺ったことがあります。自分の考えや意見が異なっても発言せず、その場をやり過ごしてしまう、つまり、仲良くワークすることが「協働性」だと捉えられているというものでした。しかし本来の「協働性」はそうではなく、例えば与えられた課題を考えていく時、グループ内の生徒それぞれの得意なところ（強み）を発揮し合って一つの答えに協働してまとめ上げていく力を養うことだと思います。それを異なっているために、教育現場においては、目立つことは避けようという風潮が見られることはあるように感じます。

本校でも少し自信を持っている生徒が発言すると、「あの子が言うなら」とついていってしまう雰囲気が強くなったように思います。しかし、その状態ではいわゆる「探究」の授業はできません。自分が興味・関心を持ったことについて、自分が何を考え思ったかを発信していかないと「探究」にはつながりませんし、そこを強くしていきたいと思っています。



多摩大学附属聖ヶ丘中学校 吉岡先生

Q

その意味からも、人の意見をきちんと「聞く」＝「理解」するということが大切になってくるのですね。



その通りです。まずは「聞く」ことなのです。この人が何を言っているのかをきちんと「聞く」ことから始まります。聞いてその意図を汲むという作業に移っていくと、例えば国語でいうと「読解力」につながっていきます。「リスニング入試」の形態のみを見てしまうと「聞く」ことだけの試験と捉えられてしまっていますが、入学後考えた入試であると理解していただきたいですね。特に国語科の中でよく話すことは、これまでの入試の中でも「視写」と言って、“カタカナの文を漢字と仮名に直す”という問題を出題してきました。入試では、漢字の問題と言え、読みがなや書き取りだけが出題されていると思われがちなのですが、そこに「視写」の出題を入れてみたのです。その出題に対応するには、カタカナだけで並んでいる文を、一度頭の中で再構成しなければなりません。文として読めないのですよね。そこで区切り方を誤ると文の内容自体が崩壊してしまいます。例えば、「キョウイクハ……」という文を「教育は……」と理解するか、「今日、行くわ……」と理解するかの違いは、文としての成立を大きく左右します。しかし、受験生は漢字に直すことを最優先にしがちです。本校では、それを漢字だけ練習してきた弊害だと考えています。そこでは、まず書かれている情報をきちんと理解・整理するという作業が入らなければ、解答へは進めないのです。そのように、本校では以前から「読解力」を大切に捉えてきました。その延長線上で、「聞く力」を問うということも入試の中で表現したかったのです。

「リスニング入試」の対策は 親と子の日常会話にある

Q

「書く」にしても「話す」にしても、まず「聞く」ことから始まると思います。自分の意見を述べる時も、それが質問の意図に沿っているのかを、得られた情報を整理し論理的に組み立てて再確認しなければなりません。それを怠ると、かみ合わずおかしい結果を生んでしまいます。やはり、「聞く」ことは大切ですね。

Q

先生が先におっしゃっていた「聞く」ということが、ただ単に「ヒアリング・リスニング」と言って機械的に反復することとか、聞いたことをただアウトプットすることとは異なるのだというお考えは、本当にその通りだと思います。そして、「聞く」ということは国語科のみではなく、英語科でもなく、すべての教科学習の基なのだと思います。そうでしょうか？

Q

少なくとも「聞く」ということができなければ、そこから先には進めませんね。

Q

受験生個々の持つ多様な可能性に着目し、「聞く力」を問う「リスニング入試」を実施することで、受験生の何を見たいと考えているか、さらに、こんな点をより重視しているという例をお話してください。

話し手がどんなに上手に話しても、その場の主導権は「聞く」側にあり、「聞く」側が「聞く」気を持たなければその話し合いは空回りしてしまいます。コミュニケーションの成否は、「聞く」側に8割のウェイトがあると言われています。その意味からも、「聞く」姿勢はすべての学びのスタートラインであると感じています。教師がしっかり事前準備して授業に臨み、良い授業だったと評価されたとしても、生徒がその授業を聞いていなければ意味のない授業になってしまいます。その意味からも、「聞く」姿勢を持った生徒に入学してもらうことは重要なのです。

そういうことになります。大げさではなく、生きていくということが、実は「聞く」ということとも言えると思います。



「リスニング入試」風景

他人とともに何かをするということは、まず「聞く」ことから始まると言えるくらい根本的なことと捉えています。

日常会話の中できちんと他人の話を聞く姿勢さえ持っていれば良いと考えています。さらに言えば、「リスニング入試」に臨む「対策」としては、保護者には「会話」をして欲しいと伝えています。「対策」はそれだけです。あとは、小学校からの連絡事項は必ずメモを取り、保護者にきちんと伝えることをルーティン化して欲しい。これ以上の「対策」はありません。食事の時間等に、今日の出来事を聞き、そのことに対して「あなたはどう思う？」と受験生自身の言葉で話してもらい、会話をするのも有効だと思います。

「リスニング入試」とは、見るところは一つでも、結果として受験生のすべてを見ることにつながっている入試、なのですね。本日は貴重なお話をお聞きすることができました。ありがとうございました。